

世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

前漢武帝がいわゆる河西回廊に設置した4郡のうち、日本人にとってなじみ深いのは敦煌だろう。この地名が我が国で広く知られるきっかけになったのは井上靖の小説『敦煌』(1959)である。同書はその後、日中合作で映画化(1988)されるなどして人気を博した。そのストーリーは、北宋の時代、科挙の最終試験である[A]の合格を夢見るも無残に失敗した主人公が西域に旅立ち、紆余曲折の後、タングート族が1038年に建国した[B]の脅威が敦煌に迫る中、仏教寺院の貴重な文献を保護するためにそれらを石窟に隠匿する、という顛末である。

この物語に登場する石窟に隠された文献というのは全くのフィクションではなく、1900年に敦煌近くの石窟寺院である[C]窟で地元の道士によって実際に発見されたものがそのモデルとなっている。これらの文献は敦煌文書と総称される。ときあたかも、中央アジアでイギリスとロシアが覇権を争ういわゆるグレートゲームの真最中で、西洋各国の探検隊、例えば、ロブノール湖や撈蘭を探索したスウェーデンの[D]などの探検隊が続々と押しかけていた。

敦煌文書にまず注目したのはイギリスのオーレル＝スタインで、発見者の道士から文書の一部を買い取って持ち帰った。彼は漢文が読めなかったためその価値に不案内であったが、続いて到来したフランスのポール＝ペリオは東洋の諸言語に堪能で、選りすぐりの貴重な文書を入手した。^[1]内憂外患で辺境にまで手が回らなかった清朝政府はおそまきながらこれを知り、敦煌文書の回収に乗り出すが、すでに多くの文書が関係者によって隠匿されており、また清朝政府が回収した文書の一部も輸送の過程で不正に横流しにあった。日本の大谷隊やロシアのオルデンブルグ隊などの探検隊が、清朝政府の対応以降に中国を訪れたにも拘わらずなくない文書を入手し、本国に持ち帰っているのはそのためである。この結果、総数6万点以上といわれる敦煌文書は世界中に分散し、欧米・アジアの80以上の機関やコレクターに

よって所蔵されることとなった。

敦煌文書は4～11世紀に制作された写本が大半で、全体の9割ほどが仏教文献である。仏教の他にも、中国で E 教と称されたネストリウス派キリスト教や、ササン朝によって弾圧された一方で南フランスや中国にも伝わり、ウイグルでは国教化された F 教、中国で祇教^{けい}と表記されたゾロアスター教などの宗教文書も存在する。敦煌でこれらの宗教文書が用いられていたのは、サマルカンドなどを中心とするソグダイアナのソグド人が、一団を組んでオアシス都市を中継するいわゆる絹の道を通した G 交易を掌握して活躍していたことによる。上記の諸宗教は彼らソグド人によって信奉され、この地に伝播したのである。

敦煌文書に記された言語に注目すると、9割は漢文で書かれていて、それに次いで多いのが吐蕃^{とばん}文字である。これは、7世紀に H によって建国された吐蕃が、8世紀後半から9世紀中頃まで敦煌を支配していたからである。

仏教寺院の遺物である敦煌文書の来歴は、これまで述べたような形でひとまず説明できる。しかしながら、実際のところ敦煌文書の内実は種々雑多で、断片的なものが大半であり、中には官庁が払い下げた公文書の裏面を再利用したものがあるなど、当時の貴重な文献を保存したものは言い難い。冒頭に述べた小説『敦煌』の浪漫的な物語とは裏腹に、仏教寺院が不要な紙片を集めて石箱にしまい込んだ、つまり不要品の処理が敦煌文書の由来の真相ではないか、というのが学界の通説的見解である。

小説『敦煌』では、仏教文献が多くを占めるこの不要品を漢族の主人公が異民族の侵寇から守るという展開だったが、現実の敦煌では異民族である吐蕃が中国王朝から仏教を守る形になっていた。というのも、吐蕃が敦煌を支配していた9世紀半ば、唐の武宗による廢仏政策によって中国本土の仏教界は大打撃を被っていたが、敦煌は吐蕃の支配下にあつたためにこの仏教弾圧を免れることができたからである。吐蕃は敦煌の仏教文化を尊重し、^[2] 敦煌在住の高僧を吐蕃に招いて中国仏教の禪宗を伝えさせたりもしている。

敦煌文書は当時の仏教寺院にとっては不要品だったが、現代の私たちにとっては小説『敦煌』のとおりかけがえのない貴重な文献なのである。

〔1〕 敦煌文書が発見された年に清朝政府は列強に対して宣戦を布告した。この戦争を何というか。

〔2〕 吐蕃本国ではこの後インド系の仏教が隆盛し、後世では密教や民間信仰と混雑して独特の大乗仏教の一派を形成した。この仏教を何というか。

(このページは空白)

II 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

移民とは、ある民族や国家の成員が就業の機会等を求めてもとの居住地の外に移住することや、移住した人を指す。近代最初の日本人移民は、1868年にアメリカ人の斡旋で行われたハワイ、グアムへの契約移民で、その後、日本人の出稼ぎ移民の移住先は北米やオーストラリア、南米などへ拡大した。19世紀に入ってから
A と呼ばれる人員や物資の輸送手段の飛躍的な発展によって、19世紀後半には移民の増加が加速した。

19世紀後半から20世紀にかけての日本人の移民先は、以下のように大きく3つに分けられる。①独立主権国家（アメリカ、ブラジルなど）やその自治領（カナダ、オーストラリアなど）、②独立主権国家の植民地・勢力圏（ハワイ、フィリピンなど）、③日本の植民地・勢力圏（台湾、朝鮮、B など）、である。①への日本人移民は多くが安価な労働者であったのに対し、③に移民したのは主に中小工商业者や農・漁業経営者などの自営業者層、熟練工、事務職員、教員、官公吏などだった。この③は、日本人の移民先のうち移民数が最も多かった地域である。1940年のおおよその日本人移民数は、台湾34万人、朝鮮71万人、B 50万人、樺太40万人、南洋群島9万人であった。これらの地域への日本人移民は、日本のアジア地域での勢力拡大の中で進められた。

朝鮮では、日本の挑発的な軍事行動により1875年にC 事件が起こり、その結果、日朝修好条規が締結され、経済活動を目的とする日本人移民が始まった。朝鮮での権益をめぐり日本と清が対立するようになると、1894年、農民蜂起が拡大したD 戦争の鎮圧を口実として日本は朝鮮に派兵し、続いて起こった日清戦争で清に勝利した日本は下関条約により台湾を植民地とした。朝鮮は1897年に国号を大韓帝国に変えて近代化改革を行うが、日本は1905年に第二次E を締結してこれを保護国化し、1910年には併合して植民地とした。これらの植民地では、日本語が公用語とされ、行政や経済分野などでも日本の諸制度が移植されたため、日本人移民が急増していった。

朝鮮に次いで日本人移民が多かったB には、1932年に日本が傀儡国家を建国していた。国策として各地から開拓団がここに送り込まれた。日中戦争の全面化

以降、多くの成年男子が徴兵されるようになると、満14歳から18歳の少年が満蒙開拓青少年義勇軍に組織され、訓練の後にソ連との国境付近の入植地に配属された。

③以外では、①に分類されるブラジルに南米で最も多い23万人の日本人が移民した。ブラジルは、1500年にポルトガル人の **F** が漂着して以降、ポルトガルの植民地であったが、1822年に独立した。1888年の奴隷制廃止以降、不足した労働力を補うために移民の受入れが拡大された。日本人移民は1908年のコーヒー農園労働者としての渡航を皮切りに増えていき、やがて日本人集住地が形成されるまでになった。

移民先では、日本人移民が現地の出来事に巻き込まれることも多かった。中米では、1910年にマデロが指導する蜂起で始まった **G** 革命に日本人移民も巻き込まれていった。**G** 革命では、ドイツ大統領の独裁体制を倒して大統領に就任したマデロも暗殺され、その後、内戦が起ころなど1917年まで混乱が続いた。こうした混乱の中、日本人移民は、アメリカ政府によるアメリカへの転住禁止令なども重なり、いずれは帰国を目指す移民から定住民へと変わっていった。アメリカへの移民は、1875年以来、移民を制限する目的で数次にわたって制定された **H** 法による規制を受けながらも増加し、1907年にはハワイを含めた在米日本人が10万人を超えるようになった。1910年以降は、何度も排斥の対象になりつつも、ハワイとカリフォルニアに移民が集中した。

1941年に太平洋戦争が始まると、アメリカ、ブラジル、**G** はいずれも連合国として日本と敵対したため、それらの国では日本人移民に対する取締りや弾圧が行われ、移民自体も禁止された。戦争中の1943年、米英中首脳が会談を開いて対日戦の戦後処理について協議し、**I** 宣言を発表した。この **I** 宣言で合意された方針に基づき、日本は敗戦後、台湾・朝鮮・**B** など③の地域を放棄し、最大の移民先を失うことになった。日本の占領後に連合国48カ国との間で調印された **J** 条約が1952年に発効すると、ブラジルなどへの移民も再開されるが、日本経済の高度成長もあり1960年後半からはそれまでのような移民の動きもなくなっていた。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句または数字を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

9世紀後半から11世紀前半までのローマ教皇の立場はきわめて不安定で、ローマ市内の有力貴族同士の抗争に巻き込まれることも多かった。そのため、ヨハネス8世やステファヌス6世、ベネダイクトゥス6世のように殺される教皇も多かった。また、行状に問題のある教皇も少なからず登場した。例えば、962年に東フランク王のオットー1世が皇帝となった時の教皇で、ローマ市の有力貴族家門出身のヨハネス12世は非常に好きな人物だったという。オットー1世以降、神聖ローマ帝国の諸皇帝も教皇を統制下に置こうと試みるが、それはローマ市の有力貴族の対立関係をさらに複雑化させることになった。このような状況を変えていくのが、910年にブルゴーニュ地方に設立された A 修道院などで始まった一連の教会改革運動である。A 修道院は多数の系列修道院からなる修道会を形成し、それが教会改革運動を各地で進める力となった。そして、このような動きに対して世俗の支配者の中にも支援する者が現れた。

神聖ローマ帝国では、A 修道院長オダイロと親しかった皇帝ハインリヒ3世が教会改革に本格的に取り組んだ。ハインリヒ3世によって拔擢された教皇レオ9世の時代以降、教会改革や教皇の権威上昇が急速に進展していく。その過程で教皇とコンスタンティノープル総主教との対立が激化し、B 年には東西教会の分裂も起きた。1056年のハインリヒ3世の没後、息子のハインリヒ4世が跡を継ぐとさらに混乱が生じた。1061年に教会改革派とハインリヒ4世側がそれぞれ別の教皇を擁立したため、10年にわたって2人の教皇が並立する事態となったのである。この状況は1073年に教皇となった C 世によって收拾されるものの、1075年以降、教皇と皇帝の対立は激化し、1076年には C 世がハインリヒ4世を破門した。ドイツ国内での立場が弱まっていたハインリヒ4世は、1077年に北イタリアの D で3日間、C 世に赦しを乞うて破門を解除してもらった。ハインリヒ4世が破門解除後すぐに反撃を始めると、C 世はその激烈な性格や妥協を好まない態度もあって、徐々に支持を失ってローマ市から追い出され、1085年にイタリア南部のサレルノで没した。このような教皇と皇帝の対立、いわゆる叙任権闘

争については、1122年の E 協約で一定の妥協がおこなわれたものの、その後も対立は続いた。このような中で教皇の権威は、イングランド王ジョンを破門したことも知られる13世紀初めのインノケンティウス3世の時代に頂点に達した。

11世紀から13世紀は、教皇庁の整備が進むとともに教皇選出に関する規定が整備された時代であった。1059年の教皇選挙令や1179年の教会会議での規定などを通じて、高位聖職者である枢機卿が選挙人となることが定められ、1274年のリヨン公会議ではコンクラーヴェによる選挙規定が定められた。

13世紀の教皇はローマ市以外に滞在することが多く、インノケンティウス4世^[1]のように在位期間（1243～1254）のほとんどをローマ市外で過ごした教皇もいた。また、夏になると避暑のためにローマ市を離れる教皇も多かった。自らの出身地である F に滞在することが多かったボニファティウス8世はその例である。

ボニファティウス8世がフランス王 G 世の側近に F で捕らえられその直後に憤死すると、教皇位をめぐる対立は激化する。ボニファティウス8世の跡を継いだベネデクトゥス11世が在位8ヶ月で没した後のコンクラーヴェは1年弱もの時間を要した。その結果選ばれた教皇クレメンス5世はリヨンで戴冠式をおこなったが、その後、ローマ市に赴くことはなく、H に教皇庁を移した。それから1377年まで教皇・教皇庁はほぼここに定着することになった。この状況はしばしば「教皇のバビロン捕囚」と呼ばれて批判的にとらえられるが、その一方で、教皇・教皇庁が一ヶ所にとどまった結果、効率的な常設の行政機構が構築されたとも評価できる。

1377年に教皇はローマ市に帰還した。だが、1378年のコンクラーヴェが混乱した結果、ローマと H の双方に教皇が並び立つ状況になった。この事態を大シス（教会大分裂）という。事態収拾のため、1409年にピサで教会会議が開催されたものの、逆に3人もの教皇が並び立つこととなり、さらに事態は悪化した。この状況は、皇帝ジギスムントの提唱でおこなわれた I 公会議でようやく解消された。

ローマ教皇は、4世紀からボニファティウス8世の時代までローマ市内のラテラノ地区にあるサン＝ジョヴァンニ＝イン＝ラテラノ大聖堂を本拠にしていたが、大シス（終結後）はローマ市外縁部のヴァチカン地区にあるサン＝ピエトロ大聖堂が拠

点となった。サン=ピエトロ大聖堂は4世紀にコンスタンティヌス帝（1世）の命によって建てられた教会で、老朽化のため16世紀から建て替え工事が開始された。教会の建て替え費用を集めるために J が販売されたが、それを批判したルターによって宗教改革が始まることになった。その一方で、教皇側も信仰上・道徳上の刷新の動き（カトリック改革）を進めた。それが本格化するきっかけとなったのが、1545年から始まった K 公会議である。1534年に創設されたイエズス会もカトリック改革の推進の大きな力となった。

このサン=ピエトロ大聖堂の建て替えに代表されるヴァチカンでの大規模な建築活動はルネサンスにも大きな影響を与えた。制作当初はフイレンツェ市庁舎前に置かれていた「ダヴィデ像」の作者としても知られる L は、 M 礼拝堂の天井に「天地創造」、そして大祭壇の背後に「最後の審判」をテーマとした壮大な壁画を描いた。この M 礼拝堂はサン=ピエトロ大聖堂に隣接する教皇宮殿の中にあり、コンクラーヴェの会場としても知られている。

【1】 インノケンティウス4世の命で大モンゴル国を訪問した修道士は誰か。

【2】 フイレンツェで活躍し、「聖フランチェスコの生涯」を代表作とするルネサンス絵画の先駆者は誰か。

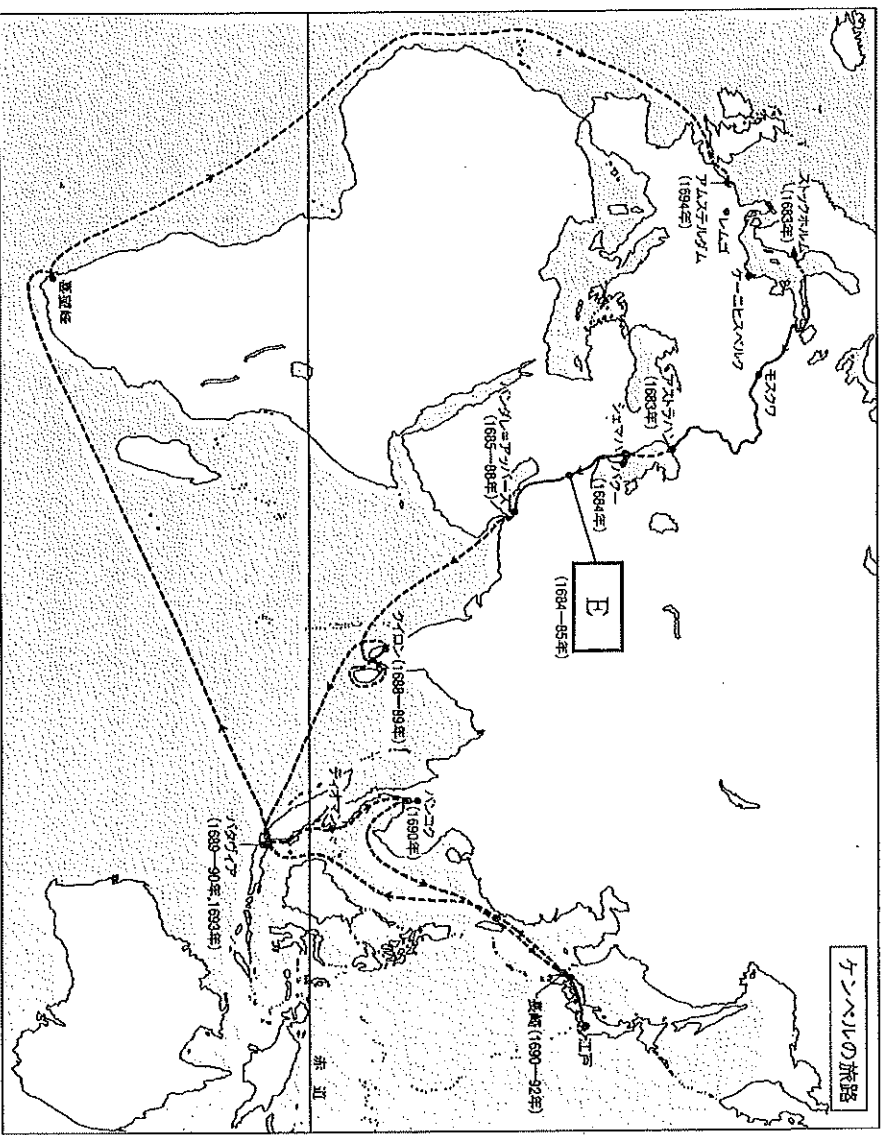
(このページは空白)

IV 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

かつての日本史教育においては、江戸時代の1630年代から「鎖国」政策が行われたとされてきた。それに対して、近年では、幕府がオランダ商館や蘭学書を通じてヨーロッパ情報を得ていた事実が重要視されるようになり、「鎖国」という概念も修正されつつある。そこで、この時期に日本と接触した人々について当時の時代背景とともに見てみよう。

17世紀の訪日ヨーロッパ人としては、北ドイツの小都市レムゴ出身の医師エンゲルベルト＝ケンペル（1651～1716）が知られている。彼は同時代の知的階層の出身だった。ケンペルは大学卒業後、学术界や貴族社会との縁故を求めて、1681年8月にストックホルムに移った。彼はそこで、当時イラン高原に位置した A 朝ペルシアへのスウェーデン使節団の秘書官に採用された。この使節団は1683年3月にストックホルムを出発し、途中、ネヴァ川沿いのスウェーデンの都市ニエンに滞在した。ニエンは1700～1721年にスウェーデンとロシア・ポーランド・デンマークとの間に起こった B 戦争中にロシアに奪われ、1703年からはここにピョートル1世によって C が建設され、後にロシアの首都となった。

さて、スウェーデン使節団はニエンを出た後、ロシアに入ってノザゴロド、モスクワへと進んだ。モスクワは、皇帝に権力が集中する D と呼ばれる専制政治を敷くロシア帝国の都で、ここでケンペルはまだ少年だったピョートル1世に謁見した。モスクワを出発した使節団は、南下してアストラハンに行き、カスピ海経由で A 朝の首都 E に至った。



B. M. ボタルト＝ベイリー著、中直一訳『ケンペルと徳川綱吉』（中公新書、1994年）より作成。

E 滞在中、ケンペルは「知識欲という病」にとらわれて、アジア旅行をさらに続けるため使節団の秘書官を辞し、1684年12月にオランダ東インド会社の上級外科医となった。そこから彼はバンダレ＝アツバース、インドに渡り、バタヴィアで勤務した後、1690年9月に長崎に到着した。ケンペルはオランダ商館医として勤務しながら、商館員の江戸参府に随行して大坂や京都を訪れている。彼は1692年に日本を去ると、再びバタヴィアに行き、喜望峰経由で1694年にオランダのアムステルダムに帰着した。

帰国後のケンペルは領邦君主の1人であるリッペ伯の特医を務める傍ら、旅行記の著述に励んだ。1708年8月にはリッペ伯の宮廷で、『モナブロジー（単子論）』（1714）の著者 **F** とも知り合った。ケンペルの東方旅行記『廻国奇観』は

1712年にラテン語で出版され、アジアに関する貴重な情報源となった。これより先、ケンペルは1700年に **G** 選帝侯ゲオルク＝ルートヴィヒの宮廷お抱え商人の娘と結婚した。このゲオルク＝ルートヴィヒとは、1714年に英女王アンの崩御と **H** 朝断絶により、英国王ジョージ1世となった君主である。ケンペルの死後、そのジョージ1世が **G** に里帰りした際、それに随行した侍医がケンペルの遺品を買い取ったが、その中には日本関連の未刊行原稿も含まれていた。その原稿は『廻国奇観』の日本関連部分を付録として加えた形で1727年に『日本誌』という題名でロンドンで英訳出版された。

他方、ロシアは毛皮を求めてシベリアを征服した歴史があり、ケンペルが謁見したピョートル1世も日本への政治的関心を持っていた。17世紀末、ロシアは清との国境紛争の講和として1689年に **I** 条約を結び、その後、1727年の **J** 条約によって民間の露清貿易が開始された。また、ピョートル1世の遺命により1725年にはシベリアから北太平洋への大規模な学術探検が開始された。毛皮資源を求めるロシア船はカムチャツカから千島列島を南下し、エカチェリーナ2世時代にはウラルツ島で事業を行っていた。当時、蝦夷地の一部を支配していた **K** 藩は、突然現れたロシア船への対応に苦慮したという。

日本と接触したヨーロッパ人の話に戻ると、1771年にカムチャツカの流刑囚ベニヨフスキーがロシア船を強奪して逃亡し、阿波国（現在の徳島県）に漂着した。彼は「神聖ローマ帝国皇后の海軍士官」を自称し、「ロシアが日本侵略を企てている」⁽²⁾という警告の手紙を残して去った。彼はもともと **L** , ロシア、オーストリアによる第1次ポーランド分割においてポーランド軍に参加してロシアの捕虜となり、カムチャツカに流された人物である。幕府はこの警告文に取り合わなかったが、日本国内でロシアと蝦夷地交易に関する論争が巻き起こった。さらに、1792年には、日本人漂流民大黒屋光太夫の送還と日本との通商交渉を目的としてロシアの **M** 使節団の船が根室を訪れた。幕府側は「長崎以外で交渉できない」と説明し、長崎入港の許可証を与えて交渉を終えた。

1801年、オランダ語通詞の志筑忠雄がケンペル『日本誌』の一部を翻訳し、その原稿に「鎖国論」と題名をつけた。「鎖国」という言葉はこの翻訳によって誕生し、日本の海防意識が醸成されていった。その後、異国船がしばしば日本近辺に出現し

たが、幕府や知識人層は蘭学書などを通じて常にヨーロッパ情報を収集していて、これによって幕末の開国準備を進めることができたのである。

〔1〕 17世紀前半にフランスからオランダに移住し、大陸合理論の祖として知られ『方法序説』を著わした哲学者は誰か。

〔2〕 この「神聖ローマ帝国皇后」とは、当時のオーストリア大公で、啓蒙専制君主とされる息子ヨーゼフ2世と共同統治を行った人物を指す。この人物とは誰か。